

触発するシンボル ——「文宣」からみる2019年香港デモ——

Affecting Symbols: Man-syun, or “Propaganda of Words” in the 2019 Hong Kong Protest

小栗 宏太
OGURI KOTA

東京外国語大学大学院博士後期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

著者抄録

2019年6月、大陸への身柄引渡しを可能にする逃亡犯条例改正案への反対に端を発し、大規模な反政府運動に発展した香港のデモ活動は多くのシンボルやスローガンを生み出した。インターネット上の交流サイトやあるいは街中に設置された「レノンウォール」に貼り付けられたポスターを通じたこうしたシンボルの拡散は広東語で「文宣」（文字の宣伝）と呼ばれる重要な宣伝戦略となった。しかし大部分のシンボルはデモに関する情報伝達や国際社会への訴求を期待するものではなく、運動の印象的な場面を切り取り、デモに関わる者の共感を誘う内向きな宣伝とでも言うべきものだった。本論考では、運動の各段階においてデモ支持者に訴えかける情動的なシンボルが生成された過程を素描することで、方法論上の差異を乗り越えた連帯や脱中心的な組織形成など、雨傘運動をはじめ香港の過去の社会運動には見られない新たな特徴として指摘されてきた本デモ活動の主体形成を、プロセスとして提示することを目指す。

Summary

Following the outbreak of mass demonstrations against the new extradition plan in June, Hong Kong in 2019 witnessed a series of anti-government protests that gave birth to numerous protest symbols. From slogans such as “Five Demands, Not One Less” and “Liberate Hong Kong, Revolution of Our Time” to illustrations depicting various scenes from the protest movement, the circulation of these symbols on the internet or on “Lennon Walls” across the city constituted an important movement strategy known as “man-syun,” or literally “propaganda of words.” This propaganda, however, seems to have served less to communicate the movement’s causes to outsiders than to consolidate the internal alliance of demonstrators and their supporters by commemorating and condensing its impressive moments. Through the analysis of various symbols from different stages of the movement, this paper aims to illustrate their roles in mobilizing protesters and forming a de-centered network in this unique “activism without leaders.” Also, by critically engaging with recent anthropological studies on affect and the agency of things that tend to associate symbols merely with the linguistic turn they claim to have overcome, this paper aims to shed a new light on the affective agency of symbols in the formation of political assemblages.

キーワード

文化人類学 アフェクト アクターネットワーク理論 香港 社会運動

Keywords

Anthropology; Affect; Actor-Network Theory; Hong Kong; Social Movement

原稿受理日：2020.12.4.

Quadrante, No.23 (2021), pp.119–147.

「和你抗爭我很愉快」（君と一緒に抗争ができて、僕は楽しいよ）
「Me too. Thx, 手足」（僕もだ。ありがとな相棒）
——2020年5月24日、国家安全維持法反対デモの現場に現れた落書き¹

「ある出来事は、たとえ妨害され、鎮圧され、回収され、裏切られても、それでもそこには乗り越えがたい何かが含まれている。（…）出来事は新しい存在を作り出し、新しい主体性（身体、時間、性、環境、文化、労働等との新たな関係）を生み出すのである」
——ジル・ドゥルーズ「68年5月は起こらなかった」（Deleuze 2003: 216）

¹ 民間陣権陣線 Facebook ページへの投稿：

<https://www.facebook.com/CivilHumanRightsFront/photos/pb.511608535553209.-2207520000../3023352024378835/>
[2020年10月1日確認]



目次

1. 香港人、加油：内向きのプロパガンダとしての「文宣」
2. メインステージなき抗争：素材の流通と加工
 - 2-1. 黄色いレインコートの男：五大要求の誕生
 - 2-2. 一緒に来たから、一緒に逃げる：「不分化」という合意
3. ささやかな革命：パロディと二次創作
 - 3-1. 粗口：すばしっこい貨幣
 - 3-2. 人話：記号化する利君雅
4. 約束の鍋底：臨界点に達する運動と連帯の未来
 - 4-1. 梁天琦：不在の英雄
 - 4-2. We Connect：マスクをとる日まで

2019年9月10日の夜、私は香港九龍地区の繁華街にある太子駅のB1番出口にいた。電車に乗るためではなく、ある「死者」の追悼の様子を見に行くためだった。10日前の8月31日、警察によるデモ隊の制圧の際、過度な武力の使用によりこの駅で死者が出たのではないかと噂になっていたのだ。制圧後、駅構内がしばらく締め切られメディアの立ち入りすら許されなかったこと、搬送者の数が消防発表と警察発表とで食い違っていたことなどの疑問点に加えて、この年の6月以降の一連の逃亡犯条例改正反対デモの中でつもりにつもった警察への不信感から生まれた疑惑だった。警察や政府は否定したものの、以降現場となった太子駅では死者への追悼と「真相」を隠す警察への抗議運動が連日続いていた。

正直なところ、私はこの「死者」の存在に疑念を抱いていた。殺人を裏付ける具体的な証拠もなければ、当日太子駅で行方不明になった人の身元についての情報も皆無だった。だからこの夜に現場を訪れたのも、本気で追悼に向かったというよりは、話題の場所を見てみ

たいという好奇心からだった。しかし現場に一步踏み入れると、そこで行われている追悼が紛れもなく本物であることに驚いた。事件の日から閉鎖が続くB1番出口は、建物全体が死者に捧げる花や供物や紙銭で埋め尽くされていた（画像1、2）。周囲に集まった人々は黙々と祈りを捧げたり、涙を拭いながら献花をしたり、メッセージを書いたメモ用紙を壁に貼り付けたり、あるいはただ遠巻きにその様子を眺めたりしていた。言葉を発する者はなく、普段は賑やかなこの街の夜には似つかわしくないような静寂があたりを覆っていた。

その時、群衆の一人が突然「光復香港」と叫んだ。するとあたりの空気が一変し、人々が口を揃えて「時代革命」と応えた。6月以降のデモ活動の中で幾度となく叫ばれてきた「香港を取り戻せ、時代の革命だ」という意味のシュプレヒコールだった。私もこれまで中継を通して何度も耳にしてきたスローガンだったが、生で聞くのはこれが初めてだった。突如として立ち込めた政治的熱気に驚き、私はその場を離れようとした。部外者の私がいるべき場所ではないと思ったのだ。しかし、その時にはすでに、掛け合いの声の輪は私の後方にまで広がっていた。「光復香港」「時代革命」と何度も呼びかけ合う人々の間を縫うように歩きながら、気づけば私の口も彼らと同じ形に動いていた。

1. 香港人、加油：内向きのプロパガンダとしての「文宣」

あの夜、太子駅の追悼現場で私が経験した力はなんだったのか。平凡な駅を即席の記念碑に変えた死の象徴か、そこに書き込まれた無数の言葉の数々か、あるいは「光復香港、時代革命」というスローガンの力だったのか。2019年6月以降、半年以上にわたり続いた逃亡犯条例改正案に端を発する香港のデモ活動

(以下、香港2019年デモ²)において、こうした言葉の力、象徴の力は強く意識されていた。民主派紙『蘋果日報』が、デモ勃発から3ヶ月を記念する特集号の表紙に選んだのは、運動の場面を写した写真ではなく、「五大要求、一つも譲らない」「香港人、頑張れ」「721を見逃して、831には人殺し」、「香港に栄光あれ」、「原爆でも手を切らない」、「マスクを外して鍋底で会おう」、そして「光復香港、時代革命」といった言葉の羅列だった。

これらの標語は、3ヶ月間のデモの様々な場面から生まれ、街頭で唱えられたり、プラカードとして掲げられたり、ポスターとしてデザインされてSNSや各地に設置された「レノンウォール」を通じて拡散されていったものだった³。抗議デモを宣伝するスローガン、シンボルや、それをういたポスターなどの視覚的なマテリアルは広東語では「文宣」(man syun: 文字の宣伝)と呼ばれ、その拡散は重要なデモ戦略の一つとなっている。通常文宣には、(1) デモや集会などの具体的なイベントの日時、場所などを伝え、運動への参加を呼びかけるもの、(2) 体制支持者に対して事件の「真相」を伝えることを意図したもの、あるいは(3) 日本を含めた海外新聞への広告記事の掲載など、明確に運動への動員を企図した宣伝活動が含まれる。

しかし『蘋果日報』の特集号に採用された言葉の羅列は、2019年香港デモについて既に一定の知識を持つ者にしか理解できないも

のであろう。上記の3種の宣伝に加え、よく知られた言葉やデモの場面をイラスト化した情報性の低いポスターやビラも同様に「文宣」と呼ばれ、運動時に盛んに作成、拡散がなされたほか、のちにそれを収集した書籍まで登場している(Abbadon 2020など)。その多くは『蘋果日報』の表紙と同様に、抽象度が高くハイコンテキスト⁴なもので、外部者に運動について伝える機能は期待できないものである。これらは一体誰に向けた「宣伝」だったのか。

デモを観察したジャーナリストの野嶋(2020)は特に「香港人、頑張れ」(香港人、加油)というスローガンに「何か普通ではない」ものを感じたという(23)。旧来の香港における政治活動の標語、例えば天安門事件の名誉回復を訴える「平反六四」、普通選挙を要求する雨傘運動の「我要真普選」とは異なり、このスローガンは政府に何かを要求するものではなく、デモの主体である香港人が香港人に呼びかける構図になっており、野嶋はそこに「帰属の確認」という特異な機能を見出している。実際に文宣制作に携わったアーティストの一人も、同様に、自らのイラストを「情報の文宣」と区別された「情緒の文宣」として位置付け、「鼓動性は持つが情報性はなく、ただ皆が見ればそこに認める情緒に基づいている」と述べ、感情的な凝集力を強調している(陳2019)。

文宣のもつ情緒的な力を理解していたのは、

² この抗議活動については、海外メディアなどにより「Water Revolution」などとも名づけられたが、未だ定着したと言える名称がないため、本稿では「2019年香港デモ」と称する。ただし、この呼称は便宜上のもので、2020年以降の抗議運動との連続性を否定するものではない。

³ 政治的メッセージを書いた色付箋を貼り付けた壁のこと。2014年の雨傘運動の際に出現し、社会主義体制下のプラハの若者たちがジョン・レノンの歌詞を書いて民主化を求めた壁にちなみ命名された(倉田・張 2015: 186)。

⁴ その一つが、「721を見逃して、831には人殺し」における「721」「831」のように、象徴的な出来事の起こった日付がそのまま象徴化されている例である。7月21日は郊外の元朗で白シャツ集団によるデモ隊や市民への無差別暴行が起こった日で、8月31日は先述の太子駅の「死者」を生んだ事件の日である。運動勃発から2019年11月末までの主な出来事は小栗(2019d)に日付ごとに整理されている。日付の象徴化・用語化に関連して、銭(2020)は「2019年の小辞典」と題されたセクションのなかで、他にも「6.12」「10.1」「11.4」「11.11」などの日付を、デモを象徴するキーワードとして立項し解説している。このようなシンボリズムは、例えば1989年6月4日の天安門事件を象徴する「8964」のように、香港の政治文化ではたびたび見られたものではあるが、これほど激増することはこれまでなかった。デモ勃発から1周年を控えた2020年6月3日、文宣作者でもあるイラストレーターの阿塗は、「Never Forget 8964」が、「Never Forget 8964612721811831929……」となり2019年デモ関連の日付が増殖していく二コマ漫画を発表している。(https://www.facebook.com/Artohk/posts/3074206259327161 [2020年10月1日確認])

デモの支持者だけではなくなった。デモ勃発から約1年後に当たる2020年7月に制定された国家安全維持法により、国家転覆を企図したものであるとみなされるスローガンを叫んだり、シンボルを掲げたりすることは、それだけで取締りが可能になった。中国国務院・香港マカオ事務弁公室副主任の会見によれば、8月31日の太子駅で死者が出たという「デマ」を流すことも処罰の対象になりうるという（明報 2020）。また「光復香港、時代革命」という標語についても、香港独立や政権転覆を意味する言葉であり、同様に取締りの対象になるとの声明が政府により発表された⁵。

しかし香港・中国政府は文宣の情緒的な動員力を正しく認識していたとしても、その1年にわたる生産と流通がデモ隊の間にもたらした変化については過小評価していたのかもしれない。国家安全維持法が導入された直後、香港には、禁止された標語をさまざまな形で暗号化して示す文宣が多数出現した（Hui 2020）。街頭には「光復香港、時代革命」という言葉を示すために、ただ8枚の白紙を掲げる人々も現れた（Bostock 2020）。文宣を通じて抗議運動を経験し、コンテキストを共有するに至っていた人々には「無文字の標語」がはっきりと読み取れたのだろう。私が太子駅の無数のシンボルの中で経験した力も、このような「情緒の文宣」が、そのコンテキストを共有し、それを理解することができる人間にもたらす力だったのではないか。

本稿では、2019年香港デモにおいて流通した情緒的「文宣」について、運動の各場面におけるその生産と流通の様子を素描することで、こうした共有されたコンテキストの生成のプロセスを示すことを目指す。資料収集としては、ネットメディアやSNSを通じた運動の各段階の言説分析に加えて、2019年6月21日～

24日、9月6日～11日の二度香港を訪問し、街頭のポスターの観察や集会での参与観察を行った。

香港の抗議運動で流通したシンボルを扱うという点では、例えばすでに雨傘運動について「3ヶ月で香港の街全体に突如出現した表現を、人類学の目で『さまざまな文化の記号と、その生態系』として捉え[る]」（倉田・張 2015: 167）のような試みも行われており、また雨傘運動の占拠時に現れた芸術についても、対外的なプロパガンダとしての効果が期待できない、対内的に運動への参加を表明するものであったとする指摘もある（黄 2018）。また社会運動論全般においても、こうした内向きに流通する記号類については、「集合的記憶」、「組織内のサブカルチャー」、「集合的アイデンティティ」など運動参加の「文化的要因」として注目を集め、分析されてきた（西城戸 2008: 44）。本論文は、そうした個別の参加者への「ミクロ動員」や運動全体のマクロな構造を分析対象とするのではなく、抗議運動のマテリアルとしての「文宣」を取り上げることで、運動の展開と共に生じた意味の連なりそのものを取り上げたい。

こうしたアプローチを取る理由は、香港の既存の社会運動とは異なる本運動の「新しさ」の生成に焦点を当てるためである。2019年デモの出現と発展は、香港の人々の「最も楽観的な予測すら越えるもの」（葉 2019a）であり、香港政治の文脈においては必ずしも自明なものではなかった。たとえば後に見るように、雨傘運動時に浮き彫りになり香港民主化運動の課題としても指摘されてきた反体制派内の路線対立（倉田徹 2019b; 李 2018; 李 2019; 張 2019 など）は今回の運動においては問題とならず、穏健派と急進派の間での連帯が強調さ

⁵ <https://www.info.gov.hk/gia/general/202007/02/P2020070200822.htm> [2020年10月1日確認]

れた。この連帯の形成については、当初の運動勃発の発端となった逃亡犯条例改正問題そのもののインパクトを要因として指摘することもできようが、改正案審議が停止された後も長期間にわたり運動が存続した理由を説明することはできない。また運動の方法論についても、明確な主導者に率いられていた雨傘運動の対比から、今回の運動は「メインステージなき抗争」（蘋果日報 2019）、「リーダーなきアクティビズム」（Su 2019）であることが指摘されてきた。この点については特にネット掲示板やSNSを活用した運動の組織作りと関連づけて説明されてきた（倉田明子 2019a など）が、同種のツール自体は雨傘運動時にも既に存在したものであり、そのような新たな形での連帯が可能になった背景を満足に説明するものではない。本論文は、長期化した運動の各段階における具体的な場面およびそこから生まれた文宣に着目することで、この新たな脱中心的ネットワークの形成をプロセスとして提示することを目指すものである。

抗議運動のマテリアルがもたらす結びつきに注目する態度は、昨今の人類学における二つの潮流とも一致するものである。一つは、ブリュノ・ラトゥールらのアクターネットワーク理論の流れを受けて、人間と関わる特定の「もの」（object）について、それが「何を意味（表象）するのか」「何を象徴するのか」ではなく「何をする（引き起こす）のか」を考える「意味からエージェンシーへ」の転回を訴える「もの」研究の流れであり（床呂 & 河合 2011: 9）、もう一つは、ジル・ドゥルーズの哲学の影響を受け、主体の内面から現れるもの、主体の内的世界を表象するものとしてではなく、人の外側から働きかけ主体性の形

成そのものを促す間主体的な力として捉えるアフェクト（情動）研究の流れである⁶。両者は、人類学における言語論的転回を乗り越え、既存の秩序や構造、あるいは個人的主体の概念に還元できない「アソシエーション」（Latour 2005）や「アッセンブリッジ」（Deleuze & Guattari 1987）といった生成しつつある間主体的な結びつきに着目しようとする点で共通している。こういったアプローチから文宣をとらえることは、既存の社会構造やフレームワークに還元できない新たな運動主体の創出過程そのものを射程に入れる上で有益であろう。

しかし、「もの」のエージェンシーやアフェクトに結びつけられる一連の研究については、言語論的転回に結びつけられる言説、記号、象徴、表象といった事柄を過度に捨象してきたという批判もされている（Keane 2005; Mazzarella 2009; Navaro-Yashin 2012; Hutta 2015; Newell 2018 など）。北キプロスを事例に内戦や分断が残した諸々の痕跡が人々に放射するアフェクトについて分析したヤエル・ナヴァロは、内戦が残した弾痕や避難民が残した遺留物といった諸々の内戦の遺物は、ただ一方的に現地の人々に影響を与えていたわけではなく、北キプロス特有の政治的、歴史的状況の中で現地の人々によって言語化され、シンボル化され、解釈されていたと指摘する（Navaro-Yashin 2012: 171）。韓国のセウォル号事件の犠牲者を追悼する抗議集会におけるシンボルの役割に注目した Sarfati & Bora (2018) は、ナヴァロの議論を抗議運動に適用し、運動の中で生まれた「共通の視覚指標」としてのイメージのオンラインでの拡散が「全く見知らぬ人々同士の間に、相互理解と愛着（attachment）」を生み、「感情を誘発し、社

⁶ 文化人類学における情動概念の導入例としては、例えば西井 (2013) がある。西井によれば、アフェクトとは、「意識や主体を越えて、共在する身体が互いに触発しあうことで、新たな活動の力を生み出していくエネルギーのようなもの」(13) であり、「主体やエージェンシーといった人間の意志を起点としてものごとを捉えていく方向性とは逆に、ものごとの流れに巻き込まれていく受動性と、そしてそこからそれでも生きていくという現実に焦点をあてる」(14) ためのツールである。

会運動へと駆り立てる」役割を持ったと分析している(566)。

香港においても、抗議運動の特定の場面やそこで発された言葉といったオブジェクトは、そのままの形で流通したのではなく、721や831のように日付と結びつけられることで歴史化されて記念されたり⁷、太子駅B1出口の事例のように特定のローカリティの中に位置づけられたりすることで⁸、象徴化され、解釈されていった。また、後に見るように、公的言説のパロディ化やポップカルチャーからの引用など、既存の言説を素材とするシンボルも多く見られた。本稿は、抗議運動から生じる素材がデモ隊の感情を喚起するシンボルとして解釈され、加工され、流通していく過程に注目することで、多様なアクターにより解釈され、意味を折り重ねられたシンボル⁹が放つアフェクティブなエージェンシーに光を当て、こうした研究潮流への貢献を目指したい。

2. メインステージなき抗争：素材の流通と加工

2019年6月21日、数ヶ月振りに訪れた香港は、政治的熱狂の中にあった。2週間前の9日、逃亡犯条例改正に反対する100万人規模のデモが行われ、法案が審議入りするはずだった12日には立法会周辺に集結したデモ隊を警察が大量の催涙弾やゴム弾を発砲して排除を強行し、内外の批判を招いていた。15日

には行政長官が法案審議の一時停止を発表したが抗議は止まず、翌16日には香港史上最大となる200万人規模のデモが行われた。この21日もデモ隊が政府庁舎のある金鐘の幹線道路を占拠して抗議を行っており、現地には5年前の雨傘運動の再現¹⁰とでも言うべき光景が広がっていた。路上は人々で埋め尽くされ、政治的メッセージを書いた付箋を貼り付ける「レノンウォール」も再出現していた(画像3、4)。

しかし、この夜、群衆の中心にあったのは「普通選挙をよこせ」という民主化の要求でも、それをステージ上で叫ぶ指導者でもなく、一人の死者だった。後の8月31日の「死者」とは異なり、この死者にははっきりとした身元があった。そしてその死は、メディアを通じて香港中の人々が「目撃」していた。

2-1. 黄色いレインコートの男：五大要求の誕生

2019年6月15日、黄色いレインコートを着た男性が、金鐘のショッピングモールに設置されていた仮設の足場の上に12日の警察の対応などを非難するバナーを掲げたのち転落死した(画像5)。男性が転落するまでの数時間は、民主派議員や市民が必死の説得を試みる様子がネットメディアやSNSでも盛んに報じられていた。訃報が伝えられるとSNSはこの犠牲者を追悼するイラストやコメントで溢

⁷ 事件以降、毎月21日や31日には、それぞれの出来事を記念する抗議集会や追悼集会が継続的に開かれていた。

⁸ 香港2019年デモが郊外である「新界」という地域とどのようにして結びついたかについては小栗(2019c)。

⁹ 旧来の象徴人類学においても、このようなシンボルのアフェクティブな側面が認識されていた可能性についても指摘しておくべきだろう。ヴィクター・ターナー(Turner 1967)は『象徴の森』においてすでに、「シンボルは行動を産む」(22)ものの、「感情を刺激するもの」(29)であると述べている。また、ターナーは、エドワード・サピアの議論を引きながら、シンボルの特徴の一つは複数の指示対象を同時に示すことができる「凝縮」(condensation)であると述べているが、これは本稿で着目する文宣における意味の折り重ねにも繋がり得る分析だろう。

¹⁰ 雨傘運動取材した日本人ジャーナリスト、小川善照による同日の同じ現場についての記述：「香港の金鐘には、日本の国会にあたる香港立法会の庁舎がある。その前を通る六車線道路の夏慤道(ハーコートロード)は、この日、六月二日の夕方からバリケードで封鎖され、デモ隊である黒いTシャツ姿の若者たちが道路に集まり占拠(オキュパイ)を始めていた。少し歩いた政府庁舎の階段脇の壁には、ポストイットに市民がそれぞれ思い思いの言葉を書いて貼っていく、レノンウォール(連儗牆)も出現していた。「反送中」「民主」「自由」などの言葉が並ぶ。駅の出口では人々にマスクやペットボトルの水などを配るデモ参加者もいた。／二〇一四年の普通選挙を求めて立ち上がった雨傘運動の光景と同じものが目の前に再び現れたのだ。」(小川2020: 8-9)

れ、プロフィール・アイコンを黒一色の画像に変更して哀悼の意を示す動きも広がった。9日の100万人デモの主催団体であり、翌16日もデモ行進を計画していた民主派団体・民間人権陣線(民陣)は、参加者に追悼のため黒いシャツを着て白いリボンを着用するよう呼びかけた。参加者が「みな思い思いのファッションをして」いた雨傘運動とは異なり、「全身黒のドレスコード」がデモ隊のシンボルとなった(小川 2020: 9-10)のはこれがきっかけだった。先述の通り香港史上最大規模となったこのデモの参加人数は、死亡した男性も加えた「200万人+1人」として発表された。

この死がこれほど大きく受け止められたのには、香港の政治的文脈において、抗議のための自殺が極めて珍しいものだったこともあったのだろう。ディストピア化した2025年の香港を描き国際的な話題となった2015年の映画『十年』には、殉死者を扱うエピソード『自焚者』も含まれていた。作中には香港独立を目指す活動家が「香港が民主を勝ち取れていないのは、まだ誰も死んでいないからだ」(香港未爭取到民主, 係因為未有人死)と語るセリフもあった。男性の死と同作が描いた陰鬱な未来との類似は注目を集め、監督が『自焚者』はわれわれが見たくないと思う未来を描いたものでした。残念ながら決して見たくはないと思っていたシナリオが現実のものとなってしまう、悲観に暮れています」(Chu 2019)とコメントを発表した。

この現実になってしまった「殉死者」は梁凌杰という名前の35歳の男性で、かつては雨傘運動に積極的に参加していたことも報じられた(彼のレインコートの色である黄色は雨傘運動を象徴する色だった)。21日はこの男性の初七日だった。占拠された路上に集まった黒服の群衆は、現場であるショッピングモールの近

くに集まって焼香をしたり、蠟燭を捧げたりしていた(画像5)。付近の歩道橋には、デモ関連で使われたプラカードやメッセージを書いた紙が大量に貼られており、梁凌杰を描いた絵も複数見られた。同様のイラストは15日以降 SNS でもしばしば拡散されており、そのうち一つには「彼の代わりに、歩み続けよう」(代他, 走下去)と書かれていた(一部のイラストは Abbadon 2020: 166-171 に収録)。

「逃亡犯条例への反対という一点」(小川 2020: 9)を理由に始まったこの運動に、「五大要求」という明確な目標が生まれたのもこの男性がきっかけだった。(1)逃亡犯条例改正案の完全撤回、(2)6月12日の立法会外での衝突を「暴動」と称した政府の見解を撤回すること、(3)デモ参加者を逮捕・起訴しないこと、(4)警察の権力濫用の責任追及のための第三者委員会の設置、(5)行政長官の辞職からなる五大要求は、16日のデモの際に民陣が掲げたものだったが、このうち(1)、(2)、(3)、(5)は死亡した男性が掲げたバナーの内容と一致していた(倉田徹 2019a, 37)。五大要求がこの男性にルーツを持つことは、民陣自体も強調している。6月9日のデモの1周年にあたる2020年6月9日、彼らはこのような声明を発表した。

我々の現在口にする五大要求とは、民陣が公布したものではなく、その雛形を最初に示したのは、梁凌杰氏である。[現場となったショッピングモールである]パシフィック・プレイスに標語をかけ、梁氏は彼の追求する5つの理想を掲げた。香港人は、ここに五大要求の基礎が固められたと深く同意している。／もしこの運動にリーダーがいるとすれば、それは立法會議員でも民陣の呼びかけ人でもなく、梁氏である。¹¹

¹¹ 民間人権陣線の Facebook ページへの2020年6月9日の投稿。

この男性の死の象徴化には、後の運動にも共通するいくつかのパターンが見られた。第一に、足場の上に立つ黄色いレインコート姿の男性の様子が強烈なイメージとなったように、運動のはじめからネット中継や報道写真などを通じて伝わるデモ現場の場面が、記号の形成・流通に大きな役割を果たした。香港2019年デモにおいて、ネットメディアや個人により「編集不可」「編集なし」の映像がSNSに中継・投稿されたことの戦略上の重要性についてはすでに指摘がある¹²。しかし、これらの素材はただ無加工で流通したわけではなく、印象的なシーンがオンラインで活動する「絵師」たちによってイラストとして加工されて、象徴化されていった。この加工により運動の各場面は、プラカード1枚、SNSに投稿される画像1枚の中に凝縮され、「ミーム」としてネット空間に広がったり、香港各地に出現した「レノン・ウォール」に貼られたり、デモ現場でプラカードとして掲げられることで現実世界に流通することが可能になった。社会運動において特定の出来事がしばしば「象徴的な反響」(Jasper 1997: 92)を持つことは既に指摘されているが、香港2019年デモにおいてはこの反響は文宣という具体的なマテリアルの拡散としても観察可能なものだった¹³。

第二に、本運動の特徴とされる「リーダーの不在」(Su 2019; 蘋果日報 2019)は、民陣の声明にも見られるように、記号の生産と流通においても強調されている。この五大要求は、

翌週「一群熱愛香港的創作人」という匿名性を強調したハンドルネームを名乗る集団によりアニメ動画が作られ、日本語版も含む各国語版も作られるなど、広く拡散された¹⁴。このアニメの最後にも黄色いレインコートの男性が映し出されており、彼のレガシーがはっきりと表現されている。

さらに民陣が発表した五大要求は、そのまま「決定版」になったわけではなく、一般の抗議者により一度書きかえられている。7月1日、デモ隊の一部が立法会に強行突入して発表した「香港人抗争宣言」では、第5の要求が「普通選挙の即時実施」に変更されていた(倉田徹 2019a: 42)。その後のデモでは民陣も普通選挙実現を第5の要求に掲げるようになり、新たな五大要求として定着した。2019年香港デモにおいて標語やシンボルが持つ意味が、運動が展開するにつれて、多様なアクターによって反復的に用いられることで固定化されたり、書き換えられたりしたことを示す事例だろう。

2-2. 一緒に来たから、一緒に逃げる:「不分化」という合意

7月1日の突入は、6月15日以来の重要な転機となる名場面も生んだ。この日は香港の返還記念日であり、政府による返還記念式典と民主派による毎年恒例のデモ行進が行われている裏で決行されたこの突入は、当初は政府・警察による扇動説も出るほど不可解な行動だった。立法会の強化ガラスを破壊するの

¹² 「多くのネットメディアがフェイスブックででも現場の生中継を行っていて、中継の特性上編集が不可能なため、撮影された出来事は漏れなくネット世界に載り、限定的ではあるが、警察の行動へ抑止力になったともいえる」(伯川 2019, 276); 「編集なしの中継画面に映し出されるデモ参加者、反デモ派、警官、機動隊の一挙手一投足が、香港、そして世界の世論形成に与えた影響は計り知れない」(倉田明子 2019a: 171)。

¹³ 人類学においても、物質に象徴的な出来事を反復させる力があることは注目されてきた。「フェティッシュ」概念の歴史を検討した Pietz (1985) は、旗、モニュメント、ランドマークなどの物質的象徴には、「出来事、場所、事物、民族」などをその中に統合する「固有の出来事の有意味な固着化」(12)という効果があると分析している。Pietz のフェティッシュ論を引き継ぎ、インドネシアのスンバ島におけるカルヴァン主義の伝道におけるマテリアリティの役割について考察した Keane (2007) は、特定の発話や信条がテキストやカテキズムなどの物質的記号としての形式を持つことで元々の文脈から切り離されて反復されることが可能になっていると分析し、これを言語人類学の術語を用いて「テキスト化」(entextualization)と呼んでいる。

¹⁴ 「香港創作人製動畫：未爭取到五大訴求 不撤不散」(<https://www.youtube.com/watch?v=ZK1hpDrSQ9M> [2020年10月1日確認])

に時間がかかったため、突入の様子は昼から夜にかけて長時間にわたり中継されていたが、そのネット中継のコメント欄にも「スパイではないか」との声が多く上がっていた。

地理学者、評論家である梁啓智は「彼らは突撃していたのではない、自殺していたのだ」と題された論評の中で、こう振り返っている。

突撃がはじまったとき、彼らの目的について、私はかなり困惑した。目的はなんなのだ。今日は立法会では審議はないのだから、実質なんの影響もない。(…)私のまわりの友人も同じように困惑していた。当時、ネット上には2種類の声があった。一つ目は、彼らはバカだ、突撃するにしてもいまいじゃないだろう、まさに政府が批判する暴徒になってしまって、この運動のポジティブなイメージに影響を与えてしまうのではないかというもの。二つ目は、彼らはスパイに違いない、親政府派に送り込まれたチンピラで、このまさに運動をぶっ壊すことが目的なのだというものだった。しかし次第に、現場から、第三の声が伝わってきた。(梁 2019)

「第三の声」とは、彼らが政府の無回答に痺れを切らし、自らの命を投げ打ってまで状況を打開しようとする決死隊であることを伝えるものだった。梁は現場にいたソーシャルワーカーの言葉を引いて、こう書いている。

彼らはスパイではなく、決死隊だった。10数人が、自らの命を犠牲にする必要があると覚悟していた。昨晚「鍋底」(立法会のデモエリアの通称)で夜通し見守りをしている時に、ミーティングをしている若者がいるのが聞こえてきた。9人が決死隊になると手を上げていた。彼らは自殺し

ようとして、異なる方法を選んだだけだったのだ。(同上)

夜になり、ガラスを完全に破壊して突入に成功した彼らだったが、突入時には立法会内の警察は消えていたため、流血の自体は避けられた。しかし、これはデモ隊に立法会を破壊させることで、デモのイメージを悪化させ、一般世論と過激派との分断を狙う政府の策略ではないかと疑う声もあった。

実際に、雨傘運動以降の香港では「平和・理性・非暴力」(和平、理性、非暴力)を掲げることから「和理非」と呼ばれる非暴力路線と、その路線を手ぬるい「左膠」(zo gaau: ゴミ左翼)的なものと罵り「武を以て暴を制す」ことを掲げる「勇武派」との対立が深刻になっていた(李 2019; 李 2018)。その区分と大まかに重なる、中国全土の民主化をも視野に入れる旧来の民主派と、香港ファーストを掲げ、香港独立に近い主張を掲げる「本土派」との対立もあった。こうした非体制派内の目標、方法をめぐる分化は香港の民主化を阻む「厚い壁」の一つとされていた(倉田徹 2019b)。

突入者の一人によれば、彼らは立法会を破壊することにより「怒りのはけ口としての闇雲な破壊ではなく、目的を持った、組織立った破壊」を行い、「それによって我々の心中のメッセージを表現しようとした」(亞裏 2019)。実際に当時の報道の中には、彼らが立法会内に書き残した言葉から、非暴力路線や議会路線への失望などを読み取る試みもあった(Chan 2019 など)。民主派とは異なり、独立に近い主張を行う本土派の議員は基本法違反を理由に立候補を認められないなど、立法会から事実上締め出されていた。2016年の立法会選挙では2名の本土派議員が当選したが、その後「中華人民共和国香港特別行政区」に忠誠をちかう宣誓を正確に行わなかったとして議席を剥奪

されている(萩原 2019)。彼ら二人が宣誓時に掲げた「Hong Kong Is Not China」は、破壊された立法会のあちこちに書かれていた。また、立法会の外の柱には「平和なデモなど無意味だと、教えてくれたのはあんただろ」(是你教我們和平遊行是沒用的)という言葉もあった(Chan 2019)。

しかし、この日の突入は、発生当初体制派が「顔を綻ばせて」期待したであろう民意の分断にはつながらなかった(葉 2019b)。民主派議員と民陣は、突入後直ちに連名で緊急声明を発表し、デモ隊の行動に理解を示した¹⁵。本土派に近い目標を掲げつつ民主派に近い非暴力路線をとる「自決派」の政治団体・香港衆志の活動家(当時)周庭は、雨傘運動時にも注目された村上春樹の壁と卵論¹⁶を引用した日本語の声明を発表し、日本の読者にデモ隊への理解を訴えた¹⁷。

民主派が勇武派などの暴力的手段を非難し手を切ることは、「絶交する、関係を断つ」という意味を持つ慣用句である「割席」(got zek)という言葉を用いて表されてきた。このデモの際にも政府は「暴力と割席せよ」という呼びかけを行い、勇武派の孤立化を図っていたが、立法会突入事件後のデモ支持者の間では、方法論上の対立を棚上げする「不分化、不割席」

(分化せず、割席せず)や「兄弟爬山、各自努力」(山を登る兄弟は、それぞれに努力しよう)、さらには「核爆都唔割」(原爆でも手を切らない)という標語がしきりに叫ばれるようになり、むしろ和理非と勇武との連帯が強調されていた¹⁸。

この流れに大きく影響したと思われるのが、深夜に行われた決死隊救出の様子だった。警察が予告した深夜0時の再突入を前に多くの突入者が撤退をはじめめるなか、数名の決死隊が現場に留まる意思を示したが、最終的には他の参加者が彼らを担いで現場から脱出したのだった。特に注目を集めたのが、ネットメディア『立場新聞』が中継した救出隊の少女と記者とのやりとりだった。

少女「Telegramで、4人が死のうとしてるって知って(戻ってきました)。一緒に来たんだから、一緒に逃げるんです」

記者「(泣きながら)もう今12時の、警察のデッドラインが迫ってるのに、怖くなかったの?」

少女「みんな怖いですよ!(泣きながら)でも明日になって、もう4人に会えなくなるのが怖いから、一緒に来たから、一緒に逃げるんです」

¹⁵ 「林鄭月娥は(…)今に至るまでなんの回答や対話の誠意を見せず、社会に向き合うことを拒絶し、市民の要求を無視し、それにより若者を絶望に追い込んでしまった。」「民主派議員及民陣緊急聯合聲明」(<https://www.facebook.com/CivilHumanRightsFront/posts/2333178010062910/> [2020年10月1日確認])

¹⁶ 「日本の作家・村上春樹がイスラエルのエルサレム文学賞受賞式(2009年)のスピーチで使った『壁と卵』の比喩は、雨傘運動でたびたび引用された。『硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます』/(…)雨傘運動の最中に行われたベルリンでの文学賞受賞スピーチの締めくくりでも、村上は香港の若者たちにエールを送り、励ました。香港の団塊世代は、消費社会のアイロニーとして村上春樹を読んでいたが(今の中国大陸でもこのような読み方が主流であろう)、自由の魂のつまった『卵』という自己認識を持ち始めた現在の香港人たちにとって、村上春樹は政治的理想と価値の応援者に変身した」(倉田・張 2015: 165)。

¹⁷ 「村上春樹さんの言葉は、香港人にとって意義深いものです。『高くて硬い壁と、壁にぶつかって割れてしまう卵があるときには、私は常に卵の側に立つ』。(…)圧迫されている力なき者に対して、過酷な責めを負わせないで下さい」(周 2019)。

¹⁸ 2019年の小辞典、によるそれぞれの語の説明:「【兄弟爬山、各自努力】『それぞれのやり方、努力で同じ頂の山を登ろう』と訳される。『和理非』と『勇武』の協力を表現するスローガンである。互いに否定するより、むしろ相手の価値を高め、ともに努力する信念である。『行動の形式(デモ、宣伝、寄付、募金など)を問わず、各自の役割を果たして貢献したら良い』という理解もできる」(銭 2020: 135-136);「【割席】絶交。仲間割れ。相手との関係を絶つ。二〇一四年の雨傘運動では、デモ参加者はお互いに疑ったり、『鬼』(スパイ)だと指をさされたりする光景がしばしば見られた。その経験を踏まえ、二〇一九年に『不割席 不篤灰 不分化』(仲間割れをせず、告げ口をせず、切り崩しをしない)というスローガンが流行った。『核爆都唔割』(原爆でも仲間割れをしない)という言い方もよく聞かれる」(同 136)。

この救出の場面は「一緒に来たんだから一緒に逃げよう」（一齊嚟，一齊走）という少女の言葉と共に様々にイラスト化され（Abbadon 2020: 11）、翌日のメディアにも、この場面が生んだ感動を伝え、デモ支持者の連帯を強調する記事が相次いで掲載された。

林鄭政権が未だ正面から民衆の『反送中』の要求に応えない中、数百名のデモ隊が昨夜一時期立法会を占領した。メインステージ [= 運動本部] のない中、デモ隊は力を残して抗争を続けるか現場を死守し収監されるかの生死の分かれ目に直面し、一度は路線がわかれた。しかし最後は『一緒に来て、一緒に帰る』（一齊嚟一齊走）の原則の下に、警察が午前零時に強制排除を行う瞬間、デモ隊は団結して、5名の、死を決意した戦友を担いで逃げた。（…）みな香港人なのだ、一人も欠けてはならない（一個都不能少）（蘋果日報：張 et al. 2019）

歴史上の多くの事件は、起こった後になってはじめて、その最も重要な意味が見えてくる。／私は今回の立法会行動の最最大の意味は、撤退の場面にあったと思う／（…）多くの人が予想もできなかった今回の立法会突入から生まれたこの救出劇は、若者への明確なメッセージとなったはずだ。我々は、もう一人も欠けてはならないのだ（一個也不能少）と。（…）我々

は一緒にはじめたのだから、終わるまで一緒だ（齊上齊落）。一人欠けることもあってはならない（衆新聞：徐 2019）

この背景には、6月29日、6月30日にも新たな自殺者が出ており、若者の絶望感が問題になっていた¹⁹こともあったのだろう。二つの記事で用いられている「一個都不能少」「齊上齊落」などの標語は、抗議自殺の連鎖を懸念する中で生まれた標語だった（画像6）。この後、7月17日の「銀髮族」（シルバー世代デモ）など、年配世代が若者への支持・連帯を表明するデモなども行われた²⁰。

こうして分化の兆候であったかに思われた一部のデモ隊による過激な行動は、反政府運動の連帯を確認する一つの名シーンを生み、その後、勇武派による行動が過激化の一途を辿っても彼らへの支持が減少しない特異な政治状況が生まれた。香港紙『明報』が2019年9月上旬に実施した世論調査によれば、「警察の暴力は過剰である」という回答が71.7%に及んだのに対し、「デモ隊の暴力は過剰だと思う」との回答は39.4%にとどまった²¹。2019年香港デモの長期化／過激化の背景には、このように非合法的な直接行動に参加するわけではないが、その大義には共感を示す運動の「周辺的アクター」（杉山 2000: 93）からの支持が果たした役割も無視できないだろう。

3. ささやかな革命：パロディと二次創作

デモ現場に溢れていた感情は、怒りや悲し

¹⁹ 突入者の一人が、涙ながらに止めようとする民主派議員に対して「[暴動罪で10年収監されることも]覚悟の上だ。もう三人も死んでるんだ」と語る様子もメディアによって報じられていた。

²⁰ 立法会突入の衝撃について、返還後香港の社会運動に造詣が深く、香港中文大学の教員も務める小出（2019）もこう書いている：「この衝撃は忘れられない。わたしは普段から学生たちに接しているため、そういう考えの学生がいることは知っていたが、本当にやるとは思っていなかった。それを聞かされた時に、『いや、ちょっと落ち着こうよ』などといった自分にショックを受けた。止めに入った民主派の議員もそうだろうが、彼らをそこまで追い詰め、命がけで危険なことをやらせてしまった大人世代の力不足を思い知らされたように思う。（…）これ以上先延ばしにすることは、若い世代にさらなる大きな負担を押しつけることでもある。実際、今回の衝撃とともに、彼らにとてつもなく大きな借りをつくってしまった気さえする。この事件以降、まさにパンドラの箱を開けたごとく週末ごとにデモが行われ、あらゆる世代が参加している。」（249-250）

²¹ 『明報』2019年9月16日。

みだけではなかった。6月21日、追悼現場から少し離れた湾仔では、黒ずくめのデモ隊が警察本部を取り囲んでいた。警察を口汚く罵倒する声や鉄柵で組まれたバリケードがたてる金属音で騒々しい現場²²に、時折、厳かな合唱が響くことがあった。デモ活動の前線の緊張を緩和するために（あるいは違法集会の取り締まり対象にならない宗教活動に擬態するために）歌われるようになっていた「Sing Hallelujah to the Lord」という賛美歌だった（倉田明子 2019b；画像 7）。非俗な罵倒語と荘厳な賛美歌は不思議な取り合わせだったが、確かに一触即発の張り詰めた場の雰囲気が一瞬ではあるが鎮まるような感覚もあった。また別の日のデモ現場では、同じような緊迫した対峙の場面で『ロンドン橋落ちた』のメロディーが聞こえてきた。当時ネット上で拡散し、話題になっていた『有班警察殺進仔²³』という警察の知性とモラルを揶揄する替え歌だった。あたりは笑いに包まれ、この時も現場に走る緊張が一瞬緩和するよう感じられた。

このように既存の言説やシンボルをねじ曲げ、皮肉や笑いを表現するユーモアも文宣の特徴の一つだった。運動のはじまりから1ヶ月ほどたった7月20日、メディア研究者の鍾曉烽はこう分析している。

過去数週間を振り返ると、デモの現場であらうと、SNSプラットフォームであらうと、

便乗標語、政治ジョーク、保守派政党を風刺するFacebookページ、警察や愛国芸能人を茶化す「文宣」デザインを難なく発見することができる。直感的には、社会運動とユーモアは、(…)相容れないものに思える。しかし、香港の過去社会運動の経験や、また世界各国の抗争の歴史が教えてくれるのが、そこに「ユーモア」は欠かせなかったということだ。(…)かつてジョージ・オーウェルはこう書いている——「すべてのジョークは、ささやかな革命である」、と（鍾 2019）

社会学者のアラン・トゥレーヌは社会運動の要素を「アイデンティティ」「対立」「総体性」、すなわち「だれかが、なにかにたいして、なにかあるものをめぐる」行うものとして定義したが（杉山 2000: 51）、権力をパロディ化²⁴、抗議主体とその敵とをより明確に分節して、誰が何に対して戦うのかを明示するような文宣も多く作られた。

3-1. 粗口：すばしっこい貨幣

このデモでは警察や政府を揶揄する際に「粗口」（cou hau）と呼ばれる広東語の卑語の使用が非常に多く見られた。粗口はもともと性的な意味をもつ卑語で、かつては黒社会的なイメージも強かった（Bolton and Hutton 1997）。政治的な場での使用も当然ながら憚

²² 同じデモの現場についての小川の記述「数千の黒い T シャツの抗議者たちが何重にも警察本部を囲んでいるのだ。「黒警、黒警」のコールがしばらく続いたかと思うと、「黒社会、黒社会」（ハッセイオー、ハッセイオー [原文ママ；より広東語の発音に忠実な表記は「ハッセイウイ」または「ハッセイオイ」]）のコールもある。警察が暴力を振るうゴロツキだとデモ隊は言いたいのである。他にも何やら、すごい言葉が出ているようだ。合流した香港人の日本語話者に聞いたが、「日本語にはないです」と言われた。すさまじいスラングのようだった。「狗警」の声も上がると、デモは一斉に、犬の鳴き声大会となった。「ウォーン、ウォーン」「ワオワオ！」やたたりリアルな犬の声には、笑いが起こった。警察本部の中からは、ガラス越しに警官が群衆を見つめていた。そして、ときおり、盾を持ったフル装備の警官が出てくると、レーザーポインターが当てられたり、さらには生卵もぶつけられたりし、しばらくすると、なす術もなく中に戻っていった」（小川 2020: 12-13）

²³ 「殺進仔」とは、警察の学歴が低いことを揶揄する悪口で、要するに「落第組」というニュアンスになる（小川 2020: 213）。その由来は銭（2020: 147-149）に詳しい。ある種の学歴差別的な意味を持つ言葉ではあるものの、銭は単に香港の学歴意識を反映するものではなく、「何の悪口でもいいから言いたい」と思えるほどに、2019年デモを通じて香港警察が市民の恨みを買ってしまった証だと解釈している。

²⁴ このようなパロディやユーモア精神は、香港文化全般についても、たとえば「模倣欲」（appetite for imitation）を特徴とする香港映画（Aufderheide 1998: 192）、「二次創作やパロディーを言論自由の象徴と見なす」香港ネット文化（張 2016: 183）などの形で語られている。

られ、雨傘運動時には「和理非」に「非粗口」を足して「和理非非」という規則が叫ばれたこともあったが、以降は徐々にデモをはじめとする政治的空間での使用も増加していた。社会学者の張彥啓は、これを、旧来の民主派的な「建前」を忌避し「本音」を求める本土派の台頭²⁵と結びつけている。

「粗口」や雑言のような言葉は、他人から距離を置く場合にも、あるいは縮める場合にも使われています。(…)セックスを比喻する言葉だからこそ、憎しみも悲しみも表現できるのです。／(…)昔の民主化運動には、「平和・理性・非暴力」のほかに、「非粗口」という暗黙のルールもあって(!)、この四つをあわせた「和理非非」という「デモ四原則」がありました。／(…)しかし、雨傘運動以来、民主派の失敗を受け、この四原則はむしろ緩められました。本土派の支持者の大半を占める若い世代には、むしろ建前ではない本音の気持ちを伝えられる「粗口」こそが格好よく見えるのです。／「粗口」は品性の観点からは確かによくありません。しかし、香港文化や広東語を深く知ろうとするならば、「粗口」を知ることが必要です。(福嶋・張 2018: 65)

張の往復書簡の相手である中国文学者・文芸評論家の福嶋亮大は、この粗口について、感情を凝縮してスピーディに流通させる性質に着目して「すばしっこい貨幣のような言葉」と要約している(同上: 80)。

2019年香港デモにおいては、先にこの禁を破ったのは警察の方だった。6月12日の強制

排除の際、大量の催涙弾やゴム弾を用いた激しい鎮圧の光景と並んで、警察が「粗口」を用いる様子を映した動画が注目を集めた。一つは、「私は記者です」と語るラジオ局の記者に対して、強制排除中の警察が「記你老母呀！走呀！」(何が記者だこのヤロウ、どけ!)と言ったことだった。これは「記者」の「記」に「屌你老母」(diu nei loumou)という罵倒語の省略であり「お前の母親」を意味する「你老母」をつけたものだった²⁶。この「記你老母」には漢字の意味を直訳した「Remember Your Mother」という英語版が作られるなどミームとなったほか、政府が15日に法案審議の一時停止(暫緩)を発表した際には「暫你老母」(何が一時だこのヤロウ)と反発をまねくなど、政府、警察の発言を揶揄するためにしばしば用いられる「構文」と化した(画像8)。

もう一つ、これ以上に注目を集めたのが、ショッピングモール内のデモ隊に対して警察が「出嚟啦，屌你老母，自由閩！」(出てこいや、クソッタレ、この自由バカ)と言い放つ動画だった。「閩」(hai)は元来女性器を意味する広東語で、粗口の中でも「最も重いタブー」(Bolton and Hutton 1997: 316)を伴うものである。肯定的な意味をもつ「自由」という言葉と、「閩」という罵倒語のアンバランスが受けたのか(音声分析の結果、実際の発言はより一般的な罵倒語である「猪閩 zyu hai」であったのではないかという指摘もされたが、興味深いことに、この動画をみた人々は集団的に「自由閩」であると誤認した²⁷)、参加者によって肯定的な自称として用いられるようになった。性研究者の何式凝は「林鄭よ自由閩に戻れ」と題された文章の中で、これを「クィア」など同様の経緯を辿った言葉に擬えている。

²⁵ 本土派の台頭については張(2019)もしくは村井(2019)。

²⁶ 「屌」は性行為を指す粗野な動詞。

²⁷ <https://lanstonchu.wordpress.com/2019/06/20/ 究竟警察說的是自由還是豬/> [2020年10月1日確認]

モラルを失った警察の口から出た言葉とはいえ、「自由闊」という言葉はいみじくも正確にこちら側の理想を言い表していた。(…)「闊」は本来女性の身体に対する侮辱であるが、同性愛者がもちいる「クィア」や「ゲイ」も元は同じ由来をもつ、受動から能動への身体の自主化の過程である。(…)自由な「闊」は、主導的に自己の快楽を、より民主的な素晴らしい将来を勝ち取る。我々は何をするにも北京の承認を求めなければならず、そのなすがままでしかない体制派の「闊」ではないのだ。ましてや、正義のため未来のために立ち上がった若者たちに冷血にも棍棒を振り下ろし、良心も脳味噌もなくしてそこかしこに(弾を)発射し(胡椒水を)ぶちまけまくる体制派の「撚」(男性器)ではないのだ。(何 2019)

この言葉は「Freedom Hi」という広東語話者にしか通じない不完全な英訳版とともにTシャツやプラカードの題材になるなど象徴化し、三文字を一文字に合わせた「合字」²⁸も作られた(画像9)。

6月12日の警察の言動は、このように様々な形で凝縮され、文宣に取り込まれていった。先述の「五大要求」の宣伝動画の中には、中継を通して広くみられた警察による強制排除の様々なシーンがアニメ化されており、その中には「記你老母」「自由闊」の言葉も描かれている。このような既存の言説やシンボルをパロディ化したり、二次加工することで複数の意味

を折り畳んで取り込んでいく「メタ・シンボル」「メタ文宣」とでも呼ぶべき文宣が数多く作られたことも、本運動におけるシンボル生産の特徴の一つだった。

3-2. 人話：記号化する利君雅

こうして警察の「悪事」の場面を凝縮して記録する様々なシンボルが流通するとともに、かつては抗議運動の最中においても人間的な交流が可能だった警察のイメージは解体され、明確にデモ隊の「敵」として描かれるようになる²⁹。中でもとりわけ警察に対する不信感が高まるきっかけとなったのが、7月21日、元朗駅で起きた白シャツを着た集団による市民への無差別殴打事件だった³⁰。襲撃を警察がわざと見過ごしたのではないかという疑惑が広まり、「警察と黒社会の癒着」を揶揄するイラストも多く作られた。イラストレーターの Little Thunder は白シャツ隊と警察を着せ替え人形として描いたイラストを描き、人気漫画家の Cuson Lo は「白シャツの集団が人々を見境なく殴っています」と助けを求める少女に対して、怪しげな笑みを浮かべた警察が「そうかい？ そもそも出かけなきゃよかったろうに」(係咩？ 邊個叫你出街啫。)と返答している漫画を投稿した³¹。

翌日の政府会見では、記者たちが警察の対応について厳しく詰め寄ったが、特に注目を集めたのが、パキスタン系香港人記者の利君雅の質問だった。かつて非華人では珍しく香港最大のテレビ局TVBの広東語チャンネルでニュースリポーターを務め、お茶の間の注目

²⁸ 2019年香港デモと合字をはじめとする漢字の造字力については吉川(2020)に詳しい。

²⁹ 小川(2020)は、雨傘運動と2019年デモとの変化の中で、もっとも違和感を覚えたのは「警察の変質」であり、以前はある程度中立な印象もあった彼らが市民にとって明確な「憎悪の対象」となっていることであつたと書いている(207-208)。小出(2019)も、雨傘運動以前の警察と社会との関係性を引き合いに、今回のデモにおいては「現場からのインターネットでの映像が多く出回り」「大多数の世論を敵に回してしまった」と指摘している(251)。

³⁰ この事件の背景については小栗(2019c)に詳しい。梁(2020)は、香港中文大学の民意調査において「警察への見方が悪くなるきっかけになった出来事はどれですか」という質問に対して回答者の8割が「7月21日の元朗駅の事件」と回答していることを挙げ、この事件が警察の「死穴」とであると指摘している。

³¹ これらの画像は賈(2019)にまとめられている。

を集めるアイコン的な存在だった彼女 (Chee 2017: 194) は、この日の会見で警察と黒社会の癒着疑惑を指摘し、直接の回答を避ける高官らに「人語で喋ってください」(講人話啦) と言い放ち、「厳しい記者」の象徴となった。イラスト化されてデモ現場に貼り出されたり³²、「今日の会見では記者が全員、利君雅だった」と語られるようになったり、実際に記者を全員彼女に置き換えた風刺画も作られたり³³と、彼女のイメージはまさに記号化されて拡散された(画像10)。

年末には、歌手のシャーマイン・フォンが彼女の言葉をタイトルにした楽曲『人話』をリリースした。この楽曲は、粗口を交えながら政府の答弁の支離滅裂な答弁を揶揄するもので、ミュージックビデオ³⁴は721事件をはじめ警察の疑惑を示す中継場面の加工映像で構成されたメタ文宣だった。Youtubeにおいて2020年7月段階で200万回近い再生数を記録している同ビデオのコメント欄には、「このビデオを理解できるのは真の香港人だけだろう」という言葉や、各シーンの出来事が起こった日付を羅列したコメントが書き込まれ、高評価を集めていた。加工され、象徴化された場面が人々の間に定着していく過程においては、このようなハイコンテキストなメタ文宣を通じた反復が果たした役割も大きいだろう。

この『人話』の他にも、粗口を交えて警察

を口汚く罵りながら「Sing hallelujah to the Lord」と歌うことで6月21日の警察本部包囲の光景を再現したフィリピン系ラッパー JB の『Fuck the Popo/ 屌狗』、6月30日の警察支持集会でデモ隊を罵倒した有名俳優の発言を加工して警察を非難する歌にしたてあげた『肥馬有話兒』、ヒップホップグループ LMF による「7分21秒」の楽曲『揸緊中指』、LMF のヒット曲をカバーし、間奏部に「香港人による香港」の時代の到来を語るチャールズ皇太子とパッテン総督による返還式典スピーチを挿入したインディーズ・バンド My Little Airport の『今宵多珍重』³⁵ など、ポピュラーカルチャーと往還しながら既存の素材やシンボルをリミックスし、政府や警察を非難する風刺曲が数多く制作されていった³⁶。

こうした文宣により積み重ねられ、凝縮されて流通した警察への不信、疑惑は冒頭に言及した8月31日の「死者」にまつわる噂にもつながり、「721は見過ごしして、831には人殺し」(721 唔見人, 831 打死人)と7月21日の事件と共に言及する標語も作られた。この名もなき「死者」も、6月以降の警察の言動にまつわる印象をコンテキストにしていたという点で、それ自体運動が生み出したメタ文宣の一つであったとも言えるかもしれない。

³² <https://www.facebook.com/UnitedSocialPress/photos/a.625319927500944/2627558117277105/> [2020年10月1日確認]

³³ 漫画家 Cuson Lo の Facebook への2019年8月8日の投稿 (<https://www.facebook.com/Cuson.LoChiKong/posts/2360884637336877/>) [2020年10月1日確認]

³⁴ <https://www.youtube.com/watch?v=ENB0BeZx4yw> [2020年10月1日確認]

³⁵ 歌詞自体は直接に警察などに言及したものではないが、9月27日に開かれた新屋嶺拘置所における逮捕者の人権侵害を糾弾する集会では、警察による性暴力を告発した女性が、自らのスピーチの際にこの曲を流した。参加者の一人はその印象をこう綴っている:「『今宵を大切に、明日はこうはならないかも/今宵を大切に、明日はまったく別物かも』。彼女の発言を聞き終えると、この古臭い言葉が、これほどの重量を持ちうるのだった」(楚思 2019)

³⁶ 香港におけるデモ活動にしばしばサブカル的なモチーフが持ち込まれることについては、これまでも指摘されており、その様子は「ストリートに出るオタク」たち(福嶋・張 2018: 168)と形容されてもいる。雨傘運動における政府との対決が『進撃の巨人』における巨人との戦いに擬えられたように、デモ活動そのものをアニメの世界観を用いて解釈する例もあった。2019年デモにおける具体的な例は小川(2020)第5章「オタクたちの闘い」。本運動の「文宣」に見られるポピュラーカルチャーからの引用については小栗(2019a)にも一部取り上げている。また運動を支持した歌手たちが大陸市場から締め出されたり、運動のシンボルをシェアした(と誤認された)歌手が大陸側のネット民から批判を受け謝罪に追い込まれたり、ポピュラーカルチャーは香港と大陸、デモの支持者と反対者が争う場の一つともなった。こうした運動とポピュラーカルチャーとの往還については、別稿にて詳しく検討することを予定している。

4. 約束の鍋底：臨界点に達する運動と連帯の未来

2019年9月、3ヶ月ぶりに訪れた香港は、すでに6月とはまた異なる様子になっていた。7月以降、運動が香港の全域に広がり、郊外でも流血沙汰の衝突が数多く起こっていた。雨傘運動時は金鐘にある政治庁舎の外壁を指す固有名詞だった「レノンウォール」は、今や香港各地の駅や団地に設置され、街中に文宣が溢れていた。私が1年前まで暮らしていた大埔でも、駅前の地下通路の全体に付箋やポスターが貼られ、「レノントンネル」と称される香港最大のレノンウォールになっていた。貼られたメッセージの多くは、運動の発生当初から中継動画や文宣を目にしてきた私には、それがいつ頃の出来事を対象にしたものか、何月何日ごろに貼られたものかが容易に想像がついた。すでに設置から2ヶ月が経っていたこのレノンウォールには、文宣の中に反復され、折り畳まれてきたが、運動の各場面が、そしてそんな流通を可能にしてきた様々な人々のつながりが、年輪のように刻みこまれているように思えた。

4-1. 梁天琦：不在の英雄

冒頭に言及した「光復香港、時代革命」という言葉も、6月にはほとんど耳にすることはなかったが、この頃までにはレノンウォールを含む街のあらゆる場所に溢れていた(画像11、12)。この言葉はもともと急進的な本土派の活動家、梁天琦(エドワード・リョン)が選挙キャンペーンに用いたものだった(何夢 2019)。「革命」と、失地回復を意味する「光復」とを含むこのフレーズは、当初は過激な言説として受け止められており、他の急進派の主張と同様に「仲間内で鍋を囲む」ような狭いサーク

ルでのみ支持を得るような言葉だった(村井 2019: 200)。ジャーナリストの張潔平は「香港反逃亡犯条例運動はいかにして臨界点に達したか」と題された7月末の論考の中で、大埔レノントンネルで初めてこの言葉を目にした時の衝撃について次のように書いている。

7月中旬、新界大埔のレノントンネルで、はじめて「光復香港、時代革命」の文字をみたとき、心の中でドキリという音がした。7月21日の上環でデモ隊が中連弁を包囲したあの夜(…)現場で黒衣の若者が大声で叫んでいたスローガンも「光復香港、時代革命」だった。(…)7月下旬に入り、反送中運動が各コミュニティに深く入り、行動範囲が広がっていくとともに、主流社会の「武力」に対する寛容度もまた上がった。そしてますます多くの若者が、梁天琦という、一瞬の輝きを放って消えた若者たちの政治リーダーを想起するようになった(張潔平 2019)

梁天琦と「光復香港、時代革命」は、この運動の中で、最も大きく意味づけが書き換えられたシンボルだったとも言えるかもしれない。2016年、繁華街の旺角で警察との衝突事件を起こし、現在も暴動罪で収監されている彼は、「和理非」的な方法論に失望した若者たちにとっては英雄的な存在だった。7月1日立法会に突入した一人はこのように回想している。

オキュパイ・セントラル(＝雨傘運動)が最終的に排除されたとき、僕はここで行われたすべてに、二度と関心を持つことはないと思った。しかし梁天琦と黃台仰、そして魚蛋革命³⁷があらわれた。頭をガツ

³⁷ 「魚蛋」(フィッシュボール)を売る屋台の取締りに反対する抗議運動がきっかけとなったことから、旺角の事件に対して支持者がつけた呼称。

ンと一喝されたような衝撃だった。彼らのメッセージはこうだった——「絶望することはない、ある方法をやってもダメでも、別の方法を探せばいいじゃないか」（亞裏 2019）

デモが長期化し、先述のように本土派／勇武派への同情や共感も生まれる中で、張潔平が述べるように、先駆者としての彼への支持も広がり、彼のスローガンも本土派の狭いサークルを越えて広がっていった。大埔レノンウォールにも、「梁天琦、ありがとう。私たちが今、目が覚めました」という言葉が貼られていた³⁸。10月9日、彼の上訴審が行われた際には多くの支持者が裁判所に集結し、護送車を取り囲んで「光復香港、時代革命」と叫ぶ一幕もあった。

このフレーズの詳細を梁自身が詳らかにしておらず、それぞれの人々が新たな意味を書き込みやすかったこともこの言葉の拡散に一役買ったとも言えるかもしれない³⁹。そのためこの言葉は用いる人によって異なる定義をもつものになり⁴⁰、最終的に目指すものがなんであれ、反体制派が共通して用いることのできる標語になった⁴¹。

この標語の曖昧さは、政府の追求を避ける上でも有効だった。10月4日に立候補受付が

ら過去のこの言葉の使用を問題視され、その意味の説明を求められた候補者もいたが、みな香港独立や暴力革命との結びつきを避ける回答を行ったためか、この標語を理由に立候補資格を停止された事例はなかった⁴²。冒頭に見たように、後に政府が直々に声明を発表し、この言葉の意味を厳密に定義しようとしたことは、こうした具体的な指示対象を持たない「浮遊するシニフィアン」（Newell 2018: 12）の影響力を認識していたからだとも考えることもできよう。

4-2. We Connect：マスクをとる日まで

前線の勇武派の行動が激しくなると共に警察による鎮圧もより激しいものとなり、中国の国慶節である10月1日には初めて警察の実弾発砲による負傷者も出た。10月4日には政府が緊急事態条項を適応し、立法会の審議を経ずに、デモ隊のマスク着用を禁ずる「覆面禁止法」を制定した。政府が強行に禁止を図るほどに、ガスマスクとゴーグル、ヘルメットを着用し、身元を隠した抗議者の姿はこのデモの「主役」を示す重要なアイコンになっていた。9月以降、各地のショッピングモールなどで歌われるようになっていたネット発の擬似国歌『香港に栄光あれ』（願榮光歸香港）には、マスクとヘルメットを身につけたオーケストラと合唱団が演奏するミュージックビデオが作成された⁴³。

³⁸ 社会運動への文化的アプローチを提言する社会学者の Jasper (1997) は、社会運動への参与はしばしばその参加者自身が認識する個人史の中で「回心の物語」(narratives of conversion) として語られると分析している (82)。香港においても、このようにしばしば運動支持への転向を語るのに「覚醒」(目が覚める) の語が用いられ、この覚醒を経ない人々を「港猪」(香港のブタ) と呼んで、運動主体である(真の)「香港人」と明確に区別する言説も見られた。

³⁹ 梁は香港基本法違反を理由に立法会選挙への出馬を禁じられた際の会見で「時代革命」の具体的な意味について記者から問われたが、「時が来れば分かる」とはぐらかしていた (林 2019)。

⁴⁰ そのうちのいくつかの解釈についてはたとえば劉 (2019) など。

⁴¹ 象徴の効果が指示対象の曖昧さにあることは象徴人類学においても既に指摘されている。ターナーの言う「凝縮的象徴」は、彼が「指示的象徴」と呼ぶ明確な指示対象を持つ象徴とは異なり、「明確さの欠如」こそが力の源になっているとされている。またレヴィ＝ストロースの「象徴的效果」論文におけるシャーマンの治癒儀礼の説明も、意味が定かではない記号の役割を強調していた (象徴人類学の古典についてのこうした解釈については、Newell 2018: 11-12)。またアフェクト理論の先鞭をつけた Masumi (2002) もロナルド・レーガンのスピーチについて「条件付けられておらず中身を持たない」からこそ受け手の側で解釈され、幅広い支持者の間に様々な感情を喚起することができたのだらうと分析している。

⁴² たとえばある候補者は、「光復」とはかつて市民が享受していた自由や暮らしの安寧を取り戻すという意味であり、「革命」も流血革命を指すのではなく、「産業革命」、「技術革命」のような大変革を指す、と説明している (囂新聞 2019)。

⁴³ <https://www.youtube.com/watch?v=oUIDL4SB60g> 「2020年10月1日確認」；

天安門事件以来用いられていた自由の女神風の「民主の女神」像に変わり、「フルギア」(full gear)と呼ばれる前線の勇武派風の重装備⁴⁴をした新たな民主の女神像も作られた。

アート性の強い「文宣」が数多く掲示され、「レノン美術館」とも呼ばれるようになっていた葵芳駅のレノンウォールには、10月下旬に、「フルギア」の女性の姿を描いた巨大なイラストも現れた⁴⁵。これは、日本のアーティスト大友昇平による「セーラームーン」風の女性の体にハローキティやポケモンなどのキャラクターを描き込んだボールペン画『平成聖母』を元ネタにしており、勇武派女性の体に運動の様々なシーンを数多く書き込んだメタ文宣だった。

前線の人々がマスクなどの装備によって互いに身元を隠したまま運動に参加する中で、「いつかマスクをとって『鍋底』で会おう」という言葉が合言葉として語られるようになった⁴⁶。「鍋底」(煲底)とは、建物の形が炊飯器(電飯煲)の底部に似ていることから立法会のデモエリアに付けられたあだ名である(画像13)。10月12日、イラストレーターの阿塗がこの言葉を題材にした『煲底之約』(鍋底の約束)とイラストを自身のSNSに投稿している⁴⁷。このイラスト

トの中では、「鍋底」に集まった人々がカウントダウンとともにマスクやヘルメットを外し、お互いの意外な素顔を笑い合う。そこに釈放された「義士」が敬礼とともに迎え入れられ、人々は犠牲者を追悼しながら「私たち勝ったんだよ」と涙を流す。最後のコマでは、これらのシーンが前線のフル装備の抗争者の夢であったことが明らかにされ、彼は隣にいる同じようなフル装備の人物に「約束だ、一緒に勝つぞ」と呼びかけている。

11月20日には、歌手のトミー・ユンが同じく『煲底之約』と題された楽曲を発表した。「夢の中を共に」⁴⁸歩んだ「僕と君」がいつの日かマスクを外して「煲底」で再会する誓いを歌うもので、プロモーションビデオのヒロインは周庭が務め、作詞は小説家でもある民主派議員のロイ・クオン⁴⁹が手掛けている。

この「鍋底の約束」というシンボルが広まった背景について、銭(2020)は「絶望の香港で政権に抵抗し続ける市民、特に前線に行っていく死んでもおかしくない人には、このような希望が必要なのではないだろうか」(137)と考察している⁵⁰。

この歌は、既存の曲やそのパロディではなく完全なる新曲であり、警察や政府への攻撃ではなく香港という共同体の「栄光」をテーマにする点で、前節に取り上げた各曲とは大きく異なっていた。本運動におけるネットの活用について分析した倉田明子(2019a)はこの歌についてこう書いている：「この歌は香港の『国歌』だ、という声も当初は大きく、実際、胸に手を当ててこの歌を涙ながらに歌う人々の姿はネット中継でもしばしば目にするところである。もともと今秋の運動では、これまでの社会運動でも歌われてきた香港のポップソング(…)などが歌われ、それ以外にも警察を揶揄する童謡の替え歌なども人気を博してきた。(…)その延長線上に、ついに、デモ参加者の誰もが一緒に、しかも特別な誇りを持って歌う歌が生まれたのである。」(184-185)

⁴⁴ 「【Gear】デモに参加する時に着用する装備(特に前線に行く人が装着する)」(銭 2020: 139)。主なものは、ヘルメット、防護ゴーグル、防毒マスク、傘など。

⁴⁵ <https://www.facebook.com/Kailanegg/photos/a.104641524267184/143759170355419/> [2020年10月1日確認]；このイラストは、2020年6月に台湾で開かれた文宣展示会『反抗的畫筆』のポスターや同時期に香港で出版された文宣集『呐喊 Voices』(Abbadon 2020)の表紙に使用されており、象徴的な文宣として認識されていることが窺える。

⁴⁶ 立場新聞記者の何桂藍によれば「いつの日かマスクを取って会いたい」という言葉は6月30日の自殺者追悼集会で既に叫ばれていた(<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=10155999648492827&set=a.10150108445227827> [2020年10月1日確認])。

⁴⁷ <https://www.instagram.com/p/B3gMUgHgO7M/> [2020年10月1日確認]

⁴⁸ 「夢」とは、ネット上でデモに参加した経験を語る際に、訴追を免れるために「夢で……に行ったんだが」と語ることが慣例化し、定着した隠語である(小川 2020: 19; 銭 2020: 138-139)。

⁴⁹ クオンは運動の初期からデモの前線で警察との交渉にあたり、黄色いレインコートの男性の転落死の際にも、現場で最期の瞬間まで説得にあたるなど、運動を象徴する人物のひとりであった。

⁵⁰ この点で、この「鍋底の約束」は社会運動の勝利を予言する「神話」の系譜に位置付けることも可能だろう。ジョルジュ・ソレルによって提示されたこの概念の具体的な運動の「宣伝」への表れについては、ヴァイマル共和政下のドイツ社会民主

このような前線での素性も何も知らない相手との連帯や、既にみてきたような政治的に異なる立場の人々との連帯や、あるいは南アジア系をはじめとするマイノリティとの連帯⁵¹など、デモに賛同する者同士の間にならぬ連帯が報告される時、しばしば「We Connect」という表現が用いられた。この言葉はもともと林鄭月娥が選挙キャンペーンで用いたフレーズだったが、彼女に反対する人々の連帯を示すために皮肉交じりに使われるようになった。それ自体が一つのパロディであるという点に加えて、まさにデモを通じて「つながる」ことを示す動詞であるという点もあり、動的なアソシエーション、アッセンブリッジとしてのこの運動の主体形成を物語る表現であるとも言えるかもしれない。

政治言説における感情の役割を分析したサラ・アフメド(Ahmed 2004)は、感情と結びついたもの／対象(object)の「流通」(circulation)が「個人的、集団的身体の『表面化』(surfacing)に決定的な役割を果たす」と分析し、感情を既存の主体の内面に還元する見方はその流通の痕跡を抹消する特殊な歴史の帰結であると指摘している。2019年香港デモにおいてもデモ支持者たちは互いのことを「相棒」、「仲間」を意味する広東語である「手足」(sau zuk)⁵²と形容し一心同体の連帯を強調してきた。本稿ではデモの場面を凝縮して記録する内輪向けのシンボルとしての文宣の生産と流通に着目することで、この連帯の形成を一部素描することを目指してきたが、短期間の街頭観察にのみ基づくものであり、個別の当事者が動員されるプロセス、個別のシンボルの生産・流通のプロセスなどについては具体的に明らかにできていない。今後、聞き取

りや回顧録を通じて当事者の語りを収集する民族誌的研究や、記号論、メディア論の観点から各文宣の生産や流通の特徴を取り上げる研究がさらに求められよう。

2020年5月、反政府活動を激しく取り締まることを可能にする国家安全維持法が北京により直接導入されることが決まり、香港の将来に対して悲観的な空気が流れる中、デモの現場に残された「君と一緒に抗争できて、僕は楽しいよ」という言葉と、そこに誰かが書き足した「Me too. Thx, 手足」という言葉の写真が民陣のFacebookページにアップロードされた。同法の制定翌日の7月1日のデモでは、粗口を交えて香港への愛着を表現する「僕たちは本当に香港が死ぬほど好きなんだ」(我哋真係好撚鍾意香港)というバナーが掲げられた。どちらの言葉も、制度への要求でも政治や正義の理想でもなく、ある評者の言葉を借りれば「香港人」として共同体に属することの「原始的で素朴な感情」を表明したもの(査 2020)であり、まさに本稿で見てきたような内向きで情動的な標語だった。

国家安全維持法の導入により政府は香港2019年デモが生み出してきた様々な記号形式を規制しようと企図しているが、このデモは、ドゥルーズが5月革命について書いたように、すでに人々の関係を変質させ、新たな主体を生み出したようにも思える。運動に共感し、その一部始終を見届けてきた人々が特定の日付(721、831)、地名(元朗、太子)、言葉(「光復香港、時代革命」、粗口)、事物(ヘルメット、マスク、黒いシャツ)そして他の人々(「手足」、警察)と関わるあり方は、運動の発生前とはすっかり変わってしまった。多様なアクターを

党のメディア戦略を取り上げた佐藤(2014)に詳しい。

⁵¹ 利君雅以外の事例については、小栗(2019a)に詳しい。

⁵² 「【手足】兄弟のような大切な仲間。二〇一九年のデモ支持者のなかでお互いの呼び方としてよく使われた」(銭 2020: 136)

触発するシンボル

巻き込んで形成されたこの新しい結びつきは、
そう簡単に消え去ることはないだろう。

【画像1】 2019年9月10日、筆者撮影。



【画像2】 2019年9月10日、筆者撮影。



【画像3】路上の群衆。2019年6月21日、筆者撮影。



【画像4】レノン・ウォール。2019年6月21日、筆者撮影。



【画像5】路上に設けられた慰霊碑。中央の写真が、人々が「目撃」したショッピングモールの足場に立つ彼の写真。右端に黄色いレインコートも見える。2019年6月21日、筆者撮影。



【画像6】「齊上齊落，一個都不能少」。2019年9月8日、筆者撮影。



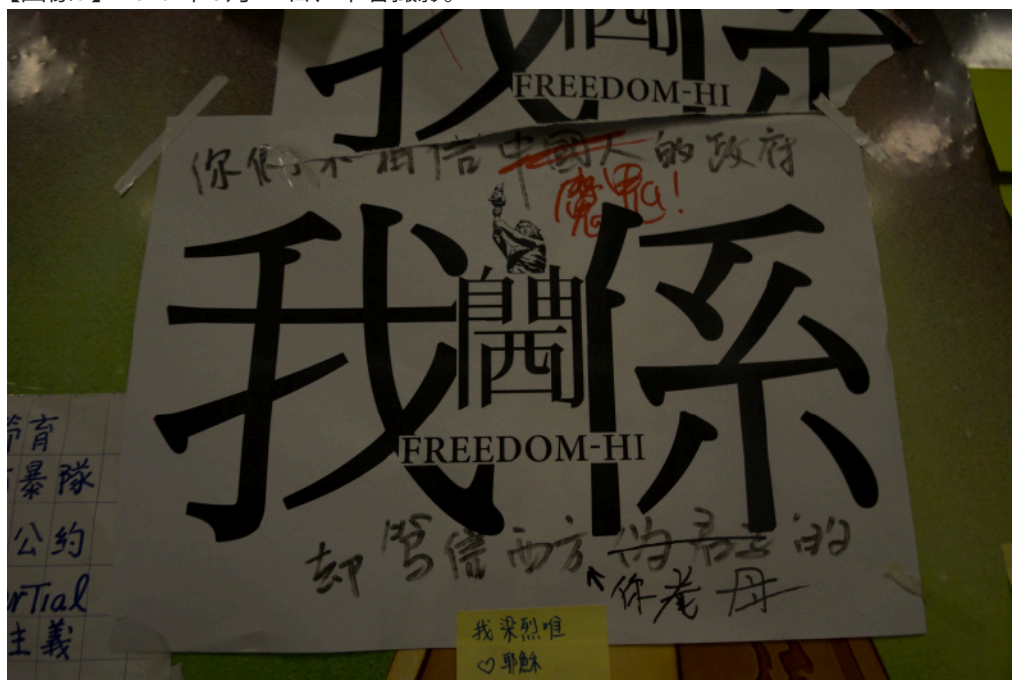
【画像7】「Sing Hallelujah to the Lord」のプラカード。2019年6月21日、筆者撮影。



【画像8】2019年6月21日、筆者撮影。



【画像9】2019年6月21日、筆者撮影。



【画像10】壁に貼り出される利君雅のイラスト。
倉田明子撮影。

【画像11】大埔レノントネル。2019年9月8日、筆者撮影。



【画像12】香港大学。2019年9月10日、筆者撮影。



【画像13】「煲底」に集まる人々。2019年6月21日、筆者撮影。



【参考文献】

- Abbadon, Childe ed., 2020, *Voices: The Art of Protest*, Hong Kong: Rock Lion.
- Ahmed, Sara, 2004, "Affective Economies," *Social Text*, 22 (2): 117–39.
- Aufderheide, Patricia, 1998, "Made in Hong Kong: Translation and Transmutation," Andrew Horton and Stuart Y. McDougal eds., *Play It Again, Sam: Retakes on Remakes*, Berkeley: University of California Press, 191–199.
- Bolton, Kingsley and Christopher Hutton, 1997, "Bad Boys and Bad Language: Chóu Háu and the Sociolinguistics of Swearwords in Hong Kong Cantonese," Grant Evans and Maria Tam eds., *Hong Kong: The Anthropology of a Chinese Metropolis*, Surrey: Curzon Press, 299–331.
- Bostock, Bill, 2020, "Hong Kong Activists Are Holding Up Blank Signs Because China Now Has the Power to Define Pro-democracy Slogans as Terrorism," *Business Insider*, 6 July. <https://www.businessinsider.com/hong-kong-activists-blank-signs-avoid-china-national-security-law-2020-7> [Accessed on October 1, 2020]
- Chan, Holmes, 2019, "The Writing on the Wall: Understanding the Messages Left by Protesters During the Storming of the Hong Kong Legislature," *Hong Kong Free Press*, 4 July. <https://www.hongkongfp.com/2019/07/04/writing-wall-understanding-messages-left-protesters-storming-hong-kong-legislature/> [Accessed on October 1, 2020]
- Chee, Wai-chi, 2017, "Model of and Model for Ethnic Minorities: Individualization of the Model Minority Stereotype in Hong Kong," Chu Yiu-wai ed, *Hong Kong Culture and Society in the New Millennium: Hong Kong as Method*, Singapore: Springer, 193–210.
- Chu, Karen, 2019, "'Ten Years' Director Kiwi Chow 'Grief-Stricken' by Death of Hong Kong Protestor," *Hollywood Reporter*, 17 June. <https://www.hollywoodreporter.com/news/ten-years-director-kiwi-chow-grief-stricken-by-death-hong-kong-protestor-1218772> [Accessed on October 1, 2020]
- Deleuze, Gilles, 2003, *Deu Régimes de Fous: Textes et Entretiens 1975–1995*, Paris: Éditions de Minuit.
- Deleuze, Gilles, and Félix Guattari, 1987, *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*, Minneapolis and London: Minnesota University Press.
- Gell, Alfred, 1998, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Oxford: Clarendon Press.
- Hui, Mary. 2020. "As in Mainland China, Hong Kongers now use code to evade political censorship," *Quartz*, 3 July. https://qz.com/1877057/as-in-mainland-china-hong-kongers-use-code-to-skirt-censorship/?fbclid=IwAR3gH_uPr6vMfpnEAgzPkNS1ygR8sUuAKdM05KylmQJ-SWZnnTwpPl_cIFs [Accessed on October 10, 2020]
- Hutta, J. S, 2015, "The Affective Life of Semiotics," *Geographica Helvetica*, 70: 295–309.
- Jasper, James M, 1997, *The Art of Moral Protest: Culture, Biography, and Creativity in Social Movements*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Keane, Webb, 2005, "Signs Are Not the Garb of Meaning: On the Social Analysis of Material Things," Daniel Miller ed., *Materiality*, Durham and London: Duke University Press, 182–205.

- Keane, Webb, 2007, *Christian Moderns: Freedom and Fetish in the Mission Encounter*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Massumi, Brian, 2002, *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*, Durham and London: Duke University Press.
- Mazzarella, William, 2009, “Affect: What Is It Good For?” Saurabh Dube ed., *Enchantments of Modernity: Empire, Nation, Globalization*, London: Routledge, 291–307.
- Navaro-Yashin, Yael, 2012, *The Make-Believe Space: Affective Geography in a Postwar Polity*, Durham and London: Duke University Press.
- Newell, Sasha, 2018, “The Affectiveness of Symbols: Materiality, Magicality, and the Limits of the Antisemitic Turn,” *Current Anthropology*, 59 (1): 1–22.
- Pietz, William, 1985, “The Problem of the Fetish, I,” *Res: Anthropology and Aesthetics*, 9: 5–17.
- Sarfati, Liora, and Bora Chung, 2018, “Affective Protest Symbols: Public Dissent in the Mass Commemoration of the Sewöl Ferry’s Victims in Seoul,” *Asian Studies Review*, 42 (4): 565–585.
- Su, Alice, 2019, “A new kind of Hong Kong activism emerges as protesters mobilize without any leaders.” *Los Angeles Times*, 14 June. <https://www.latimes.com/world/asia/la-fg-hong-kong-youth-activism-decentralized-protests-20190614-story.html> [Accessed on October 1, 2020]
- Turner, Victor, 1967, *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu Ritual*, Ithaca: Cornell University Press.
- 亞裏, 2019, 〈第一批衝入立法會 最前線抗爭少年的自白：我有心理準備隨時會死〉《立場新聞》，2019年7月12日。 <https://thestandnews.com/politics/專訪-第一批衝入立法會-最前線抗爭少年的自白-我有心理準備隨時會死/> [2020年10月1日確認]
- 小川善照, 2020, 『香港デモ戦記』 集英社。
- 小栗宏太, 2019a, 「世界都市の舞台裏：マイノリティたちの苦悩」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』 東京外国語大学出版会, 221–224.
- 小栗宏太, 2019b, 「香港デモの記号学：広東語、パロディ、ポップカルチャー」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』 東京外国語大学出版会, 289–295.
- 小栗宏太, 2019c, 「新界、もう一つの前線：元朗白シャツ隊事件の背後にあるもの」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』 東京外国語大学出版会, 298–339.
- 小栗宏太, 2019d, 「2019年反逃亡犯条例運動クロニクル」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』 東京外国語大学出版会, 385–376.

- 何式凝, 2019, 〈林鄭, 請你做返個自由閩!〉《立場新聞》, 2019年6月24日. <https://thestandnews.com/politics/林鄭-請你做返個自由閩/> [2020年10月1日確認]
- 何夢, 2019, 〈關於「光復香港, 時代革命」〉《輔仁媒體》, 2019年7月28日. <https://www.vjmedia.com.hk/articles/2019/07/28/197626> [2020年10月1日確認]
- 倉田徹, 2019a, 「逃亡犯条例改正問題のいきさつ: 法改正問題から体制の危機へ」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層: 「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』東京外国語大学出版会, 14-66.
- 倉田徹, 2019b, 「香港民主化への厚い壁」 倉田徹編『香港の過去・現在・未来: 東アジアのフロンティア』勉誠出版, 10-22.
- 倉田徹・張彥啓, 2015, 『香港: 中国と向き合う自由都市』岩波書店.
- 倉田明子, 2019a, 「ネットがつくる『リーダー不在』の運動: 通信アプリ『テレグラム』から見る運動のメカニズム」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層: 「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』東京外国語大学出版会, 168-191.
- 倉田明子, 2019b, 「香港の『逃亡犯条例』改定反対運動とキリスト教会: 最前線で歌い続けられた『賛美歌』」『キリスト新聞』, 6月16日. <http://www.kirishin.com/2019/06/16/25786/> [2020年10月1日確認]
- 賈雅緻, 2019, 〈【多圖】7.21 血洗元朗 香港插畫家以圖諷「警黑勾結」〉《立場新聞》, 2019年7月22日. <https://www.thestandnews.com/culture/多圖-不斷更新-7-21血洗元朗-香港插畫家以圖諷-警黑勾結/> [2020年10月1日確認]
- 小出雅生, 2019, 「わたしの見てきた香港デモ」 倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層: 「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』東京外国語大学出版会, 225-258.
- 黃宇軒, 2018, 〈藝術與抗爭: 雨傘運動中的政治參與〉鄭煒、袁瑋熙編《社運年代: 香港抗爭政治的軌跡》香港中文大學出版社, 141-156.
- 查映嵐, 2020, 〈我哋真係好撚鍾意香港〉《立場新聞》, 2020年7月2日. https://www.thestandnews.com/culture/我哋真係好撚鍾意香港/?fbclid=IwAR2Px7UWyxqdxIyhLzm2XvxXO5j4V3J4gBX_foI4I4p0RLfa3RD5eZs_4 [2020年10月1日確認]
- 佐藤卓己, 2014, 『増補 大衆宣伝の神話: マルクスからヒトラーへのメディア史』筑摩書房
- 眾新聞, 2019, 〈張秀賢、劉青等人收選舉主任信件 要求解釋 FB 上的「光復香港, 時代革命」〉《眾新聞》, 2020年10月15日. <https://www.hkcnews.com/article/24193/2019區議會選舉-光復香港,時代革命-張秀賢-24193/張秀賢、劉青等人收選舉主任信件-要求解釋fb上的「光復香港,時代革命」> [2020年10月1日確認]
- 周庭, 2019, 〈香港に関心を持つ、日本の皆様へー昨日の占拠運動について〉《立場新聞》2019年7月3日. <https://thestandnews.com/politics/香港に関心を持つ-日本の皆様へ-昨日の占拠運動について/> [2020年10月1日確認]
- 徐俊文, 2019, 〈終於想通了衝入立法會的意義〉《眾新聞》, 2019年7月2日. <https://www.hkcnews.com/article/21757/香港-21757/終於想通了衝入立法會的意義> [2020年10月1日確認]

- 鍾曉烽, 2019, 〈從港式幽默說起—反修例運動中的情感與抗爭日常〉《端傳媒》, 2019年7月20日。
<https://theinitium.com/article/20190720-opinion-chung-hiu-fung-everyday-politics/> [2020年10月1日確認]
- 杉山光信, 2000, 『アラン・トゥーレーヌ：現代社会のゆくえと新しい社会運動』 東信堂。
- 楚思, 2019, 〈縱然晚晚惡夢 今宵珍重堅持—新屋嶺集會給我們的養份〉《Medium》, 2019年10月6日。
<https://medium.com/@chorse/beveryst-42bcbcf7f7c> [2020年10月1日確認]
- 張彥啓, 2016, 「日本文化の受容」 倉田徹・吉川雅之編『香港を知るための60章』 明石書店, 181-184。
- 張彥啓, 2019, 「香港本土派とは：対中幻想からの決別」 倉田徹編『香港の過去・現在・未来：東アジアのフロンティア』 勉誠出版, 183-200。
- 張潔平, 2019, 〈49天, 香港反送中運動如何來到臨界點?〉《Matters》, 7月28日。
https://matters.news/@az/49天-香港反送中運動如何來到臨界點-zdpuB2ZHV88bmbfSc6eK8MLBppUC31RwxVLDZbLpt2QMhwZKT?fbclid=IwAR2aq5JLCmOvnaA1cvWr0H8_bVQwj2IVa2kxtgjpAs6ZWZIrZRWuDn0fOEg [2020年10月1日確認]
- 張文傑・于健民・梁銘恩・王春怡, 2019, 〈清場前最後一刻戰友抬走死士「一齊嚟一齊走!」〉《蘋果日報》, 2019年7月3日。
- 錢俊華, 2020, 『香港と日本：記憶・表象・アイデンティティ』 筑摩書房。
- 陳零, 2019, 〈葵芳大型文宣創作人現身：唔好再縮喇, 我哋無犯法〉《眾新聞》, 2019年11月5日。
<https://www.hkcnnews.com/article/24623/葵芳連儂隧道-文宣創作人abaddon-反送中文宣-24647/葵芳大型文宣創作人現身：唔好再縮喇,我哋無犯法> [2020年10月1日確認]
- 床呂郁哉・河合香吏, 2011, 「なぜ『もの』の人類学なのか?」 床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』 京都大学学術出版会, 1-21。
- 西井涼子, 2013, 『情動のエスノグラフィ：南タイの村で感じる・つながる・生きる』 京都大学学術出版会。
- 西城戸誠, 2008, 『抗いの条件：社会運動の文化的アプローチ』 人文書院。
- 野嶋剛, 2020, 『香港とは何か』 筑摩書房。
- 伯川星矢, 2019, 「香港ハーフから見た香港人の絶望と希望」 倉田徹・倉田 明子編『香港危機の深層：「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』 東京外国語大学出版会, 260-288。
- 福嶋亮大・張彥啓, 2018, 『辺境の思想：日本と香港から考える』 文藝春秋。
- 蘋果日報, 2019, 〈沒有大台的抗爭〉《蘋果日報》2019年7月1日。
<https://hk.news.appledaily.com/local/daily/article/20190701/20717269> [2020年10月1日確認]
- 明報, 2020, 〈張曉明：說8・31打死人引憎恨或違法 鄭若驊：不能單看一事定論 前提需涉助外國竊情報〉《明報》, 2020年6月30日。
<https://news.mingpao.com/pns/要聞/article/20200702/s00001/1593629094198/張曉明-說8-31打死人引憎恨或違法鄭若驊-不能單看一事定論-前提需涉助外國竊情報> [2020年10月1日確認]

- 村井寛志, 2019, 「香港人アイデンティティは“香港独立”を意味するのか?」倉田徹・倉田明子編『香港危機の深層:「逃亡犯条例」改正問題と「一国二制度」のゆくえ』東京外国語大学出版会, 196-220.
- 葉健民, 2019a, 〈香港人小勝一場, 但未來挑戰更艱難〉《端傳媒》, 2019年6月20日. <https://theinitium.com/article/20190620-opinion-rayyep-hongkong-fugitive-offenders-ordinance/> [2020年10月1日確認]
- 葉健民, 2019b, 〈建制派, 你們知道發生了什麼事嗎?〉《明報》, 2019年7月12日. [https://news.mingpao.com/ins/文摘/article/20190712/s00022/1562850413771/建制派-你們知道發生了什麼事嗎-\(文-葉健民\)](https://news.mingpao.com/ins/文摘/article/20190712/s00022/1562850413771/建制派-你們知道發生了什麼事嗎-(文-葉健民)) [2020年10月1日確認]
- 吉川雅之, 2020, 「字体の新造と変形の最前線: 激動の香港に見る」『FIELDPLUS』24: 6-7.
- 李祖喬, 2018, 〈勇武抗爭: 香港的知識分子與暴力/武力的觀念〉鄭煒・袁瑋熙編《社運年代: 香港抗爭政治的軌跡》香港中文大學出版社, 207-221.
- 李祖喬, 2019, 〈左膠〉朱耀偉編《香港關伴詞: 想像新未來》中文大學出版社, 265-274.
- 劉耀玲, 2019, 〈香港反送中口號“光復香港時代革命”意味甚麼?〉《美國之音》, 2019年11月28日. <https://www.voacantonese.com/a/what-the-slogan-means-to-hk-people-20191128/5184809.html> [2020年10月1日確認]
- 梁啟智, 2019, 〈他們不是在衝擊。他們在自殺。〉《Matters》, 2019年7月2日. <https://matters.news/@leungkaichihk/他們不是在衝擊-他們在自殺-zdpuAtjnFkUp1P6fD4udryPkAE4kC8jQgLFZZMbysVukVkhgS> [2020年10月1日確認]
- 梁啟智, 2020, 〈反修例民意匯集〉《立場新聞》, 2020年5月26日. <https://www.thestandnews.com/politics/反修例民意匯集/> [2020年10月1日確認]
- 林彥邦 (2019) 〈有關時代革命〉《立場新聞》, 2019年10月6日. <https://www.thestandnews.com/politics/有關時代革命/> [2020年10月1日確認]

